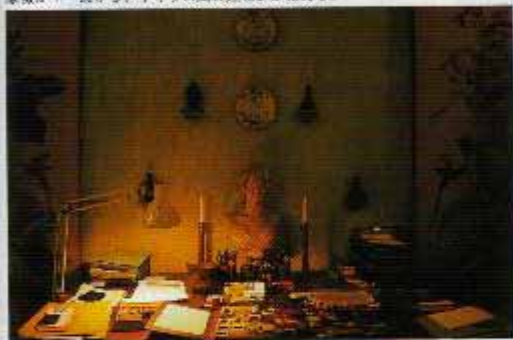


楽園計画

「もしかすると、ローマに引っ越すかもしれない。同じ思惑に長くはいられない性分なんだ」

上/彼の仕事机の上。計算された乱真。
下/自宅の書斎。傾いた書棚はヴィスコンティ家の家業か？ 窓から、イタリシ風の建物群が見える。



「僕は半職人で半芸術家さ」欧州唯一の「僕」デセント・デザイナーは独身貴族

ガイド・トスキ・マラッツァーナ・ヴィスコンティ。この長い名を聞いて、映画好きなら一人の男を思い出さるう。ルキノ・ヴィスコンティ。「郵便配達に二度ベルを鳴らす」や「山猫」「スミスに死す」など数々の名曲を撮った映画監督である。

その名前のとおり、両者は縁戚関係にある。中世からルネサンス期を通じて自治都市ミラノ公園を統治した名門貴族ヴィスコンティ家の末裔である。ヴィスコンティとは本来、子爵の爵だが、一旗の北イタリアにおける歴史はそんな軽々しいものではない。

興味のある読者には史書を讀んでいただくとして、ここでは手短かに触れる。ヴィスコンティ家の興隆は一二〇〇年代後半、ピアチェンツァ司教だったバルド・ヴィスコンティが教皇グレゴリウス十世に選ばれたことに始まる。グレゴリウス十世は殊腕をもって歴史に残るが、彼は姻戚のオットーネをミラノ大司教に任じ、枢機卿となったオットーネが餅マツテオを神聖ローマ皇帝代理となす。これ以降、ヴィスコンティ家のミラノ支配は確立。十四世紀末、ジャンガレアッツォの治世に、ミラノ公園はロンバルディア、ピエモンテ、リグリア、エミリア、ヴェネツィアにまたがる強国となる。ドッオーネを建設し、ミラノを今日に至る大都市にしたのも彼である。

とまあ、いかにヴィスコンティ家が名門であるか、おわかりになったと思うので、これで物語はお終い。「お終い」が余りに重くて、金持ちだと誤解されることもあるよ。でも、ヌーヴォー・リッパシュ（新興成金）には、よく効く名刺さ」

ガイドはニコリとませず、いたすらつぽく言った。「父はミラノのヴィスコンティの縁戚だったけど、もういなくなっちゃった。彼はコンピニョータ会社を



経営していて、アンティークが好きな絨毯コレクター
 でした。母は昔童に囲まれて育ったので、僕もき
 っと両親の影響を受けたのでしょう」

気温は根氏、度々霧度、無量りの空から、今にも
 天使の羽が舞い降りてきそうな朝だった。バラック
 オの前で待ち構えていたグイドは、僕たちを仕事場
 屋に招き入れると、外を指し示した

「小さいけれど、なかなかいい庭でしょ？」

後でわかったが、彼はテントだけでなく庭造りも
 する造園家だった。井戸と花木のある清浄な庭だっ
 た。庭もさることながら、馬の向こうの家並みを気
 にしていると感じた彼は、すかさず言った。

「トリノは不思議な街です。フランス、イギリス、
 ドイツ、この街はかつての支配者や近隣の国々の影
 響をいまだに残しています。あの建物は、イギリス
 様式を取り入れているんですよ。」

グイドは一九六二年生まれ。トリノ大学で政治学
 を修めた後、広告代理店に入り、広告制作とマーケ
 ティングの仕事に就いた。しかし効用期からの背痛
 郡味が頭をもたげたため、仕事を辞してイギリスに
 渡り、室内装飾を学んで装飾師となった。かくて、
 イタリヤの古典主義的的血統に、イギリスの革新
 を追求する進取の気性が織り込まれた。

「アラブの盗取性とイギリスの社交性、更に日本の
 空間と様式的美、つまり戦場での武将の茶の湯のよ
 うなね、そうした異文化を融合させて現在という時
 空の流れを止め、異なる時空を現出させたんです」
 彼は学校を卒業すると、インテリア・デザインナーに
 なった。しかし満足ならず、造園家に転じる。

グイドが希求するものは、食欲なき芸術的野望と、留
 まるところを知らない冒険家精神によって血肉化され
 る。彼は旅をする。世界中を見て回り研究を重ね、そ
 して九一年、ヨーロッパ唯一のテント・デザイナー
 となった。グイドの中には、明らかにヴィスコンテ



古い工機師を招いたのフ
トには、芸術家・職人の技
の粋もろがはいっている。こ
こで造園家の伊藤と仕事を
することもある。ガイドの
作品のひとつと書式。

ガイドの作品、アラビア風テントのスケッチ。



彼のテントはほとんどが大きくて、フ
ッチな人たちのガール・パーティー用
に作られる。



古き良き日のハイ・ソサエティのピク
ニック気分を盛り上げる。



「インドには素晴らしいテント作りがありました。彼
のテントは雨漏りがしましたけど、僕は学究ではな
い。観察者なんです。半職人、半芸術家とも言えま
すわ」

仕事机の上に、ドラフティング・テーブルの上に、
壁面に、彼がデザインしたテントの写真やスケッチ
があった。きわめて独創的。僕たちが知るテントの
概念を打ち破るものばかりである。

古いスタイルのテントが好きなんです。既製品は
つまらない。僕は注文を受けてから、一点一点デザ
インします。顧客は広い庭のある邸宅に住み、世界
で唯一のオリジナル・テントを注文できるお金持ちた
ち。ブレタ・ホルテもあるんですけどね」

燃え上がる炎の形をしたもの、エジプトのピラミ
ッド風、ナポレオン遠征軍の野営を模倣したものミ
ニ。それらガイドのテントは、いずれも上流階級や
富裕階級の社交パーティー、結婚式などに用いられる。

「顧客はフランス、イギリス、ドイツ、ヨーロッパ
全域です。カトリック、ドヌーヴ家のテントも作り
ましたよ。問題は彼らが僕の仕事を正當に評価して
くれないので、お金を払ってもらおうのが簡単な
いうことです」

建機上階にある彼の住まいに行くと、母親クリス
ティーナ・リーヴァが姿を現した。手に白い薔薇の
花のブーケを持っている。彼女はそれを、僕のコー
ダイネイターに手渡した。

「ほら、これをあなたに。今日は聖人様の日でしょ
う。まあなくガイドが多忙をさねる日目がやつてく
る。パリ、ロンドン、あちこちのガーデン・ブニア
を飛び回らなくてはならない。趣味の山歩きも乗馬
も、しばらくはお預けだ。機身の彼のパーティー、二
匹の犬たちは誰が面倒を見るのだろうか」